

メディア総研 連続研究会 「メディアと戦後70年」第5回 「ジェンダーと戦後70年」

戦後七〇年を迎えた今年、さまざまな角度から戦後の日本社会とメディアの問題を検証するメディア総

研の連続研究会の第五回「ジェンダーと戦後70年」が、11月28日に東京で開かれた。ゲストスピーカーとして、元ラジオ日本で(株)ケーブル・パーソンスの代表取締役を務める平松昌子さんが登壇。研究会の進行はメディア総研運営委員を務める谷岡理香・東海大学教授が担当した。

「1960年代のベトナム戦争を、当時のラジオ関東の唯一の女性記者として現地取材した経験のある平松さんは、明治以来一貫して日本のメディアを支えてきたのは男性であり、戦後の民放が女性を採用し始めたものの、メディアを女性が担う状況には至っていない、と分析。

「もしメディアで働く人の半数が女性だったら、国会議員の半数が女性だったら、企業の経営者の半数が女性だった

ら」と問題提起した。1975年に社会問題となり、放送打ち切りとなった即席めんものCM「私作る人、僕食べる人」を会場で上映した谷岡さんは「1975年が国際婦人年だったために、この差別的表現に女性の反発が強まった」として、さらに中止問題を報じた新聞の論調がまた女性蔑視的な表現だったことに注意を促した。一方で平松さんは「残酷なニュースは女性アウンサーが読むのは不適切」などの観念が根強く、男性の考え方に感覚を合わせないと報道の仕事が続けられない、と女性が考えていたことに触れ、男性的な発想がメディアの現場を支配している実態を紹介した。

現在、国連などの場では「2030年には男性と女性を五〇対五〇に」といった運動が進められており、平松さんは「日本の男性は世界の流れと違う価値観の中にいて、ガラパゴス状態になるのではないか」と懸念した。その一方、「若い男性の間では育児休業を取得したいと考えている人が八割くらいいる」として、男性の間で意識の変化が多少進んでいる面があることを評価した。



平松昌子さん(右)、谷岡理香さん(左)



女性協議会

民放労連女性協議会は第四二回定期大会後、新執行部に交代いたしました。この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

議長 山田舞子



お世話になっております。日本テレビ労組の山田と申します。女性協では、議長を務めさせていただいております。

2010年入社で、営業局CM部を経て、スポット営業部でスポンサー渉外を担当しております。組合活動については、不慣れな点

を中心テーマの一つとして取り組みました。力を入れた甲斐もあり、会社との折衝の結果、一定の成果も残したつもりです。しかし、まだまだ改善の余地はあります。

男性ではありますが二児の父親でもありますので、育児問題、そして女性の働き方の改善に尽力していきたいと思っております。

副議長 山川英一郎



単組では、執行部を二期務めました。先期は単組書記長として育児・介護問題

書記長 梅山文郁

このたび書記長を務めさせていただきます。テレビ東京労組の梅山文郁と申しま

●女性協 URL http://www.minpororen.jp/women/index.html



慣れない新人時代を経て、ここ最近ようやく「働き方」というものに向き合えるようになってきたかなと思っております。そして、仕事をすることで、職場環境がいかに整っているかというのが非常に大切なことだと日々実感しております。そんな中、初めて女性協常任として任務に就く機会を頂きました。

至らぬ点も多くあるかと思いますが、何卒宜しくお願いいたします。

東北地連女性協議会 定期大会&女性のつどい

自分の働き方に信念を

11月21日(土)、仙台にて第四六回民放労連東北地連女性協議会定期大会、そして午後からは、第八回東北地連女性のつどいが開催された。会場の仙台市民会館には、東北各地から総勢



の東北地連女性協議会の新体制が承認された。女性のつどいでは、情報交換の場として、各単組が抱える問題や悩み等、情報交換がなされた。

館を訪れた。オープン当時から盛況である耳にしていたが、当日もやはり盛況でイルカ・アシカショーは満員のお客さんの中行われていた。被災をした松島水族館から引越ししてきた生き物たちもこの水族館には多くいる。津波で被害を受けた場所に建設された

九州地連女性協議会 定期大会

「仲間」の存在が力に

九州地連女性協の定期大会は10月31日(土)に福岡で開催され、役員含めて九州各地から一十九名、地連から三名(うち男性二名)、次回全国女性のつどいが開催される沖繩からも一名の参加がありました。

でもあのときの被害を繰り返すことのないように震災から五年を迎える宮城は一歩ずつ、しっかりと復興していることを参加者全員が感じられたように思う。そして、また来年も若手組合員にとって魅力のあるYフェスを開催したいと感じた。



九州地連女性協では毎年、女性組合員に対するア

ママワーカー。「その時の自分の選択、働き方に自信を持つことが大事!」という言葉は印象深く、我々の背中を力強く押しもらった気がした。

実際に前例があったり、また一緒に憤ったり喜んだりできる仲間の存在を確認できるだけでも明日への力になるのだということを実感した一日でした。

今、どの局も社員外スタッフが居なければ立ち行かない状況の中で、彼らがどういった環境を望んでいるのか適切な判断をするためにも、今後アンケート等の本格実施を検討していく必要があると考え、次期の課題としました。